

第69回 “社会を明るくする運動” 作文コンテスト受賞作品

令和元年に実施した、第69回 “社会を明るくする運動” 作文コンテストには、愛知県下の小学生10,330名と中学生7,884名の応募がありました。そのうち24名の入賞作品が選ばれ、田原市内の小中学生2名も受賞されました。その2名の素晴らしい作文をここに掲載させていただきます。おめでとうございます。



愛知県推進委員会委員長賞（小学生の部）

わたし一人が世界のためにできること

田原市立田原中部小学校 五年 藤城夏帆

「本、折ったでしょ。」

「わたしじゃないよ。」

いけないことは分かっていたけど、わたしはウソをついてしまった。

始まりは、わたしがお姉ちゃんの大切な本を折り曲げてしまったことだった。わたしのお姉ちゃんは本がすごく大好きで、たくさん本を持っていて、その一冊一冊をすごく大切にしている人だ。お姉ちゃんはある日、わたしに言った。

「わたしには、始め白黒の本達が、読み終わった後、にじ色に見えるの。」

わたしにはよく分からないけど、本をとっても大切にしていることは分かった。そしてどんな本を読んでいるのか気になって、お姉ちゃんに本を借りた。いつも本といっしょにねているお姉ちゃんのまねをして、私もまくら元に置いてねた。そしたら、朝、すぐくあせった。本の真ん中くらいのページが折り曲がっている。いっしょにねていたから、きつと体で本をふんでしまったんだ。

まよったけどお姉ちゃんにはひみつにしておくことにした。何も言わずに、ただお礼だけ言って本を返した。しばらくして、お姉ちゃんがわたしに言った。

「本、折ったでしょ。」

その目にはおこっているようにも悲しんでい

るようにも見えた。けどわたしは言ってしまった。

「わたしじゃないよ。」

いけないことはわかっていたんだ。けどぼれないと思った。

「じゃあだれ。」

そう聞かれてわたしはまた、言ってしまった。

「ごっき、それが部屋に入ってきた時、やっちやったんじやない。」

わたしがやったことなのに、それを妹のせいにした。わたしは失敗を、小さなウソで罪悪に変えてしまった。正直に言っていれば。これから妹はどうなるのかな。わたしは大きな罪悪感に包まれた。そのことで頭がいっぱいで、何もかもができなくなりそうだった。お姉ちゃんの大切な本。わたしがきずつけたのは本だけではない。お姉ちゃんの心もきずつけてしまった。

わたしは正直に伝えることにした。

「ごめんね。本当はわたしが本を曲げたの。」

おこられるのを覚ごで言った。けどどちがった。

「知ってたよ。折ったのは仕方ない。でも、ウソをつくのわたし、大きらいだから。」

わたしはうそをつくことで、自分、お姉ちゃん、妹、たくさんの人をきずつけてしまった。小さな失敗が、二度の最低なウソにより、大きな罪悪を生んだ。ウソをついたことで守られたのは、一しゅん。わたしは、失敗と罪が全くの別ものだと知った。失敗とは、一しゅんの後悔。罪とは、人をきずつける一生の後悔。

仕方ない失敗もある。でもそれを罪に変えるのは、自分自身。

世の中では毎日、あつてはならない犯罪がたくさん起きています。それによって、きずついた人は、もっともつとたくさんいる。でもきつと、その多くが、小さな失敗が始まりだと思つ。

わたしは、正直に、失敗を「ごめんなさい」と言えなかった。それはわたしに、勇気がなかったからだと思う。けど、その一しゅんの勇気のために、人をきずつけるようなウソは、もう絶対につきたくない。一度ウソをつくと、二度、三度、と大きくなつていく。

犯罪とは、絶対にやってはいけないこと。犯してしまいそうな自分を止める勇気、犯罪が少しでもへるように、ストップさせる勇気、犯罪を犯してしまった人を受け入れる勇気。一人でも多くの人が勇気を持つことで、犯罪の道がふさがると思う。一人でも多くの人が勇気を持つことで、だれかの心は救われると思う。一人の勇気が、十人、百人、千人……、より大きな勇気になることで、できることは増えると思う。わたし一人の勇気では、世界を変えることはできないと思つけど、わたし一人の勇気で、だれかの心を動かせるような人でいたい。そしていつか、一人一人が支え合つて、笑顔でくらする、明るい世界になつたらいい。

